

研修報告書

広島県立広島中学校

小寺 恭子

1 はじめに

私はこの夏、ハワイにあるカピオラニコミュニティーカレッジ (KCC) で多くのすばらしい体験をした。私はこの研修に参加するにあたり3つの目標を立てていた。

- (1) 効果的な教材の開発と効果的な指導法を見付けること
- (2) 日本とアメリカの先生たちの人的ネットワークを作ること
- (3) 自分の英語力を改善し向上させること

この研修を通して私は EFL 生徒の英語力を高めるための指導法を多く学び、自分の授業で使えるヒントを得た。更に、自分の教育哲学を考える機会も得た。例えば、「なぜ英語を教えているのか。教師として一番やらなければならないことは何か。やる気はなぜ学びに必要なのか。どうやって生徒をやる気にさせるのか。生徒に何を求めるのか。教師としての自分の目指すものは何か。」私は今までにそんなことをじっくり考えたことがなかったので、自分の教育哲学を考えることは、私にとってはとても貴重な時間だった。自分自身に向き合い、教えることについてじっくり考えることができた。この報告書で KCC での研修についてもう一度振り返ってみたいと思う。

2 私の教育哲学

私は教えているとき、生徒の嬉しそうに笑う顔や成長を見るのが好きだ。私はたとえ生徒に対して悲しんだり、怒ったり、失望したりするときがあっても、生徒とともに感情を分かち合うのが好きだ。教師はどんな時でも自分の授業を楽しむべきだ。教師は生徒が安心して楽しく授業を受けることができるように環境を作るべきだ。教師は決して笑顔を忘れず生徒を励ますべきだ。教師は生徒に学ぶ楽しさを教えるべきだ。またその一方で教師は生徒に尊敬されるように威厳をもつべきだ。私たちが教師としてこのことをもち続ける限り生徒は教師を信頼し、慕ってくれると思う。生徒が喜びを感じていれば、たとえ彼らに与えられたことが困難であっても、生徒は恐れずに新たなことに挑戦し、学ぶことに最大限の努力をしようとするものだ。頑張ろうとする前向きな気持ちが生徒にやる気を起こさせる。教室で生徒がやる気をもって学習活動に取り組んでいる時、彼らは更にたくさんのことを学びたいと望んでいると思う。

3 KCC で学んだこと

私を主に指導してくださったのは Malm 教授と Dudzik 教授であった。お二人ともとても親しみやすく、私は英語を使ったり英語で討議したりする機会をたくさん得ることができた。彼女たちは3つの明確な目標をもって指導してくださった。

- (1) 受講者の英語力を向上させるような機会を提供すること
- (2) 受講者に SLS 指導法の概要と英語指導における様々な技法を体験させること
- (3) 受講者に EFL 指導に関連する問題を研究し討議し調査する機会を提供すること

これらの目標を達成するために、多くの課題が与えられた。まず初めに、EFL の指導に関する書物を読んで討議した。次に生徒相互の対話や生徒の会話力を向上させる指導方法、ライティングにおける指導法、リーディングにおける様々な指導法を学んだ。そして CBI

を用いたスピーキングの指導法を学んだ。様々な教授法を学んだ後、授業で使えるようにそれらを用いた新たな教材やワークシートを作り、指導案を作成した。私に課せられた課題の中で最も重要なことは、研究論文を書き最後のプレゼンの準備をすることだった。

これらの体験を通して私は自分の英語力の改善、特に話す能力の改善を図ることができた。明確な目標、ステップアップできるトレーニング、教師の緻密な準備によって生徒のやる気と英語力は改善することができるということに気が付いた。教師が生徒の英語力を向上させたいと願うなら、教師は努力して自ら英語を学ぶことを継続するべきである。その結果、生徒は学ぶことは自分たちの将来において意味のあることだと気付くだろう。

4 KCC で学んだ印象的な活動

4-1 Concept Map

Dudzik 教授の授業を参観した時に、Concept Map について学んだ。それは Brainstorming に似ていたがそれとは違うものであった。Concept Map は関連しあったものを見ただけで分かりやすく図で表したものだ。これは自分たちの考えを明確にしたり書いたりする時にとても役立つ。私たちは多くのことを学ぶ時に、多くの情報を得る。そしてどの考えが同じで、どの考えが違うのかを上手に整理しなくてはならない。何かをまとめる時に、その関連性を考えなくてはならない。この方法（図）を使えば、私たちは自分の考えを構築し、論理的に説明することができる。生徒にライティング指導をする時に、Concept Map は効果的な活動の一つであると思う。

4-2 Feedback

私は Feedback のプロセスにも感銘を受けた。Feedback には教師から生徒へ、生徒から生徒へと様々なタイプのものがあった。教師が生徒にコメントしたりアドバイスしたりした時、生徒はそのコメントやアドバイスを聞いてしっかり考えようとした。そして自分たちの理由や考えを言い合っていた。この活動を通じて、生徒は聞く能力、話す能力、考える能力を向上させる機会を得ていた。そして協力することの大切さも感じていた。私は Feedback もまた生徒のやる気を起こさせる効果的な活動の一つだと思う。

4-3 Challenge and Solution

「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能について学ぶ時にはいつも Malm 教授は私に Challenge and Solution について質問した。彼女は教師にとって生徒の今の課題は何か、それをどのように解決していくかを考えることは大切であると教えてくれた。課題を明確にすることは指導するうえで役に立つ。教師が効果的な指導法を見付けたいと思うなら、まずは生徒の課題を明確にし、解決案を考えることが必要である。もし課題が明確にできるなら、その解決法を見付ける手がかりになる。

4-4 Free-writing

私は Free-writing は生徒の書く能力を改善する効果的な活動であると思う。Dudzik 教授の授業で私は辞書を使わずに自由に物語を書く体験をした。物語を書いた後で私たちは作品を交換し Feedback を行った。それはとても楽しかった。Free-writing の目的は Fluency（流暢さ）にある。生徒は細かい文法を気にしなくてもよい。生徒は自分の思ったことをどんどん書き続けていくだけでいい。この活動を通じて生徒は書くことへの楽しみを見出し、やる気を高めることができる。

4-5 Poster Session

私は Poster Session はとても効果的な活動であると思う。Yamamoto 教授の授業を参観した時に、Poster Session の作り方を見て感銘を受けた。特にそのプロセスに興味をもった。最初生徒たち Brainstorming を行った。次にお互いの意見を交換し、それについてもっと討議した。リサーチが必要なときは、パソコンを使いメモを取った。最後にポスターを制作し、グループの中の一人がそれについてレポートをした。彼らは3つの役割を交代でこなしていた。一人はリーダーで残りのものは記録者とレポーターであった。彼らは何度も Poster Session をする機会を与えられ、その結果、流暢に英語を話すことができるようになるのだそうだ。私たちが Poster Session のように人の前で話す時、まず深く考え自分の意見をまとめる。(この時に読む力と書く力が必要となる。)次に、相手と意見を交換し合う。(この時に聞く力と話す力が必要となる。)このような活動は Integrated-Skill Approach (統合された技法)につながる。また生徒は互いに協力することを学び、お互いの意見を交換する。このグループ活動は生徒にとってコミュニケーションを図るためにも意味がある。彼らが学んでいることは彼らが必要としていることに関連しているからだ。つまり、彼らは英語を実生活に生かすことができるということだ。私は Poster Session のような活動が私の生徒にも必要であると感じた。このプロセスは私には新鮮であったので、あるひらめきを感じた。

5 研究論文

5-1 どのように研究テーマを決定したか

「Integrated-skills Activities を用いて生徒の意欲と話す力を高めるための取組」
このテーマを決定するにあたって、次のようなことが要因となった。

(1) 広島中学校の教育方針

「6年間の計画的・継続的な教育活動により幅広く深い教養と高い知性を培い、グローバル化時代において活躍することのできる人材を育成する。」とある。

もし生徒たちが英語を話すことに自信をもつならば、彼らは積極的に自分の考えや感情を表現することができるだろう。

(2) 生徒の課題

彼らは教室以外で英語を使う機会が少ないので、人の前で英語を話すことは恥ずかしくてうまくできない。彼らをもっと英語を使い話す機会をもつなら、今より自信がもてるようになるだろう。特に日本では日常生活でそんなに英語を使わなくてもいい。だから生徒は英語を理解するために多くの語彙を必要とし、基本的な文法を知らなくてはいけない。教師は意図的に現実に合った状況で英語を使うような機会を設けなくてはならない。

(3) Poster Session

私は生徒の話す能力を高めるには、Poster Session は効果的な方法であると思う。

(4) 学ぶことへの動機付け

私たちが何かに興味をもっている時、私たちは決してそれをやめたいとは思わない。更に私たちはもっとそれを続けたいと思い、進歩したいと思う。学ぶことは継続である。私は動機付けは学ぶためには必要なことだと思う。

5-2 統合された活動

なぜ “Integrated-skills” (統合されたスキル) が必要なのか。ロングマン辞典によると, “Integrate” とは「効果をもたらすために2つないしそれ以上のものを統合させること」と定義されている。英語を教える中に, 4技能(聞く, 話す, 読む, 書く)がある。つまり “Integrated-skills” とは4技能の統合である。私たちが1技能以上を使わなくてはならない状況は多くある。つまり私たちが英語を理解する時, 私たちは少なくとも2つ以上の技能を必要とする。だから “Integrated-skills” が必要になるのだと思う。また, 新学習指導要領でも4技能の統合が主張され, 生徒のコミュニケーション能力の促進が求められている。その上, 平成24年には中学校の英語教育において, 語数が従来の900語から1200語程度に増加されている。生徒にとっても教師にとっても大変なことになることは予想がつく。だからなおさら教師はできるだけ早くより興味深く効果的な指導法を生徒のために見付けなくてはならないと思う。

5-3 統合された活動と動機付け

どのようにして統合された活動は生徒をやる気にさせるのか。もし教師が効果的で役に立つ意味のある指導法を見付けたら, うれしいに違いない。なぜか。なぜならそれは生徒たちに学ぶことは自分たちにとって役に立つ意味のあることであると感じさせることができるからだ。仮に生徒が聞くことは苦手だが読むことが得意ならば, 彼らは読むことを通じて英語を理解することができる。話すことは苦手だが書くことが得意ならば, 彼らは書くことを通じて英語を理解することができる。このように4技能は互いにつながっている。だから教師はそれぞれの技能を統合するような活動を考え作っていくべきだと思う。1つの技能だけでは生徒に理解させるのができないかもしれないが, 別の技能が生徒を助けてくれるかもしれない。統合された活動は生徒のやる気を高めると思う。そのような理由から様々な技能を統合した Poster Session は生徒にとって効果的な活動の1つであると思う。

6 パワーポイント

プレゼンテーション用のパワーポイントを作るときは大変だった。(恥ずかしいけれど) 私はコンピューターを使うことが得意ではないから, パワーポイントを作る時に時間がかかった。Malm 教授は私のことをとても心配してくれた。でも何とか成し遂げた。私は「あきらめなければ何でもできる」ということを改めて感じた。Malm 教授が私のパワーポイントを見たとき彼女は喜んでこう言った。「よくやった!」彼女の言葉は私を幸せにしてくれた。これも KCC での良き思い出の1つである。

7 課外授業

教室以外でも私の英語力を改善し向上させる材料は沢山あった。

7-1 ホームステイ

7月29日~7月31日まで私はホームステイを体験した。滞在中, 私は2種類のパーティーに参加することができた。1つは子どもの1歳の誕生を祝う記念パーティーであった。沢山のゲストが招かれその子を祝った。1歳の記念パーティーはハワイではよくあることだと聞いた。もう1つのパーティーはホームパーティーであった。それはポットラックパーティーと呼ばれるものだった。参加者は食べるものを持ち寄っておしゃべりを楽しんでいた。

7-2 歴史的な場所への訪問

Malm 教授は私をいろいろな所へ連れて行ってくれた。最初に訪れた場所はカイルアにあるウルポヘイユであった。そこは聖地で、オワフ島で2番目に大きいヘイユである。私たちはそこで開催されたジャズコンサートやフラダンスを見たり、ハワイの食べ物を食べたりしてハワイの文化にふれた。次に訪問したのはプランテーションヴィリッジであった。そこでは移民の歴史、プランテーションの生活、労働条件、住居について学んだ。次にビショップミュージアムを訪問した。そこにはカメハメハ王家の展示物が沢山あった。そこで私はフラダンスとその意味や精神について学んだ。最後に訪問したのはパンチボールであった。そこは国立記念墓地で、「戦争と平和」について考えさせられた。広島の人々が「8月6日」を決して忘れないのと同様ハワイの人々は「12月8日、パールハーバー」を決して忘れない。

7-3 人的ネットワーク

KCC で私は英語を学びに来ている何人かのグループに出会った。その中の1グループは韓国の教師集団であった。時々昼食時間に彼らと話をして楽しんだ。昼食時間は他の人とコミュニケーションをとるとてもいい機会であった。そこで私は人的ネットワークを作ることができた。3週間の滞在で私は自分の聞く力と話す力がだんだんと向上していることに気が付いた。

8 おわりに

私は20年近く中学校で英語を教えてきた。英語を教える中で、私は自分の指導法は果たして良いのか悪いのかはっきりと自信がもてなかった。なぜなら自分の指導法を支えてくれる学術的な根拠がなかったからだ。しかし KCC で私は学術的な根拠によって支えられている多くの効果的な活動や技法を学んだ。よって自分の指導法にも少しは自信をもてるようになった。私は“Content-based”, “Task-based”, “Brainstorming” “Interaction” “Critical-thinking”, “Feedback”, “Integrated-skills” など技法や活動に興味をもった。生徒に「聞く」「話す」「読む」「書く」を教える時、これらの技法を取り入れたいと思う。この研修を通して、教えることに情熱をもち続けることは教師にとって大切なことだと改めて気付いた。だから私は生徒のためにたくさんの興味深い副教材や活動を見つけていく努力をし、それを教科書のレッスンに適応させていきたいと思った。副教材や活動は生徒の現在の言語レベルにマッチするものでなくてはいけないし、理解できるような内容でなくてはいけない。生徒が楽しみを見出し、自分たちが何を学んでいるかわかるなら、そのレッスンは大成功である。毎回の授業がこんな風であるなら、生徒は英語の授業を楽しみ、英語を学ぶことに自信をもつようになると思う。生徒が自信をもてば、彼らはもっともっと学びたいと思うようになると思信している。

最後に KCC で私に考えたり学んだりする機会を与えてくださった多くの人に特に感謝の気持ちを表したいと思う。

